

第3回寝屋川市立幼稚園・保育所の在り方に関する審議会記録（要点筆記）

1 日時

令和3年3月2日（火）14時30分から15時45分

2 場所

寝屋川市役所議会棟5階 第二委員会室

3 当日の参加者等

(1) 出席委員（10名）

日浦委員（委員長）、竹内委員（副委員長）、青木委員、名畑委員、乾委員、
有山委員、池峯委員、九條委員、田中委員、新宮委員

(2) 事務局（8名）

（こども部） 畑中部長

（保育課） 中村次長、吉田課長代理、田中副係長

（学校教育部） 田井教育監

（学務課） 中村課長、牧野係長、高見係長

(3) 傍聴（1名）

4 会議次第

(1) 寝屋川市小学校就学前の教育・保育について

(2) その他

要点筆記

【1 開会】

(事務局)

本審議会の成立について事務局より報告させていただきます。

本日は、委員 10 名中 10 名出席いただいております。従いまして、委員総数の半数以上の出席がございますので、本審議会規則第 6 条第 2 項の規定に基づきまして、本審議会が成立していることをご報告申し上げます。寝屋川市では、市民参画の推進と市政運営の透明性の向上を目的に、委員会等における会議は原則公開するものとしており、非公開の決定は、審議会委員長が会議に諮って行うことになっておりますがいかがでしょうか。

(委員長)

会議の公開につきまして、事務局からの説明がありました。原則通り公開ということではよろしいでしょうか。

(委員より異議なしの声あり)

(委員長)

それでは本審議会は公開とさせていただきます。傍聴はございますか。

(事務局)

傍聴の申出でございますが、現在 1 名ございます。

(委員長)

寝屋川市審議会等の傍聴に関する要綱の規定に基づき、これを許可したいと思います。よろしいでしょうか。

(委員より異議なしの声あり)

(委員長)

それでは、傍聴人に入場していただきます。

(傍聴人入場)

(委員長)

本日の議題でございますが、議題(1)寝屋川市小学校就学前教育・保育について、(2)その他となっております。議題に移る前に、第2回審議会が2か月以上前で行ったので、少し振り返りをさせていただきたいと思っております。

第2回審議会では配布資料が二つあり、一つは寝屋川市教育大綱で、この資料からは寝屋川市の教育理念、就学前教育と小学校以降の教育の連続性、つまり縦の連携について寝屋川市の教育がどのように行われているかということが理解できました。もう一つの資料は、寝屋川市小学校就学前教育支援プログラム審議会からの報告で、この資料からは幼稚園・保育所園・認定こども園といった就学前施設が就学前教育・保育について共通認識をもつ、つまり横の連携について理解することができました。

第2回審議会において、審議いただいた主な意見を整理しますと、主に三つに分類されると思います。一つ目は、寝屋川市の全体的な教育の推進について、二つ目は、就学前教育・保育の推進について、三つ目は、家庭環境の変化に対応して就学前教育・保育施設はどのような役割を持っているかということについてご意見をいただいたと思います。

一つ目の寝屋川市の全体的な教育の推進については、委員の皆様と確認したことでございますが、「考える力」を育てるということが寝屋川市の教育では特に大切で、縦と横のつながりの考えを持たなければいけないということを共有できたと思います。縦というのは、就学前教育・保育施設と小学校教育・中学校教育とのつながり、そして横というのは、幼稚園・保育所園・認定こども園といった就学前施設間のつながりでございます。ここでいうつながりとは、就学前施設間の連携ということもございますが、教育・保育内容の連携というつながりでもあります。また、教育のカリキュラムについては、校区単位ぐらいで9年間のカリキュラムというよりも12年間ぐらいのカリキュラムを考えていかなければいけないのではないかという意見もございました。

二つ目の就学前教育・保育の推進については、各就学前教育・保育施設がバラバラに行うのではなく、就学前教育・保育施設が寝屋川市の子どもたちの人格面、学習面、運動面でも、それぞれの根っこを育てているという意見もございました。また、それぞれの施設が教育・保育を一生懸命やっているが、単独でやるのではなく横のつながりが大切ではないかという意見もございました。就学前教育・保育を小学校・中学校を含む寝屋川市の全体的な教育の中に位置づけることも大切ではないかという意見もございました。そして行政の課題にもなりますが、つながっていく仕組みというものが大切ではないかという意見もございました。そして、幼稚園・保育所園・認定こども園・小学校のそれぞれが壺のようにその中では教育・保育を大切に行っているが、閉ざされた壺の中だけでそれぞれが行うだけでは上手くいかないというご意見もございました。

三つ目の就学前教育保育施設の役割については、家庭環境の変化に対応でき

る施設であることが大切であり、時代や社会の変化に伴って今が悪いということではなく、今の状況の中で就学前の教育・保育施設にどういう役割が求められるかと考えると、子どもの発達についての特に社会的なところになりますが、兄弟姉妹の数が減っているなど、それを補完するような役割とか色々な方法がありますが、子どもが異年齢の子と接するようなこと、あるいは兄弟姉妹数が少なくて譲り合う経験が減り、そういうことがだんだん苦手になっているとか、そういうことも含めた教育が必要ではないのかというご意見もございました。また、寝屋川市で育っていくにはこういうことが必要ではないかというようなこともございました。育てるということは難しいのですが、先の見通しを持ち、市として大切なことを示す必要があり、そういうことがなければ市としての力がなくなるのではないかという意見もございました。また、市の教育方針として、見通しを持つことが大切であるという意見もあったと思います。

もう一度まとめさせていただきますと、一つ目は寝屋川市の全体的な教育の推進として、特に考える力を育てるという教育理念を推進する役割が市にはあり、就学前教育はその根っこを育むものであり、縦のつながりもございます。

二つ目は小学校に繋がる就学前の教育課程を就学前の教育・保育施設どうして連携するといった横のつながりが大切だということでございます。

三つ目は社会情勢の変化や、家庭環境の変化の延長にあって、家庭で十分できないところを就学前の教育・保育施設が補完する役割があるということも、皆様のご意見として共有できたのではないかと思います。以上が振り返りでございます。

では、本日は何を審議するかと申し上げますと、議題としては寝屋川市小学校就学前の教育・保育についてと大きなものでございますが、先程の振り返りから皆さんにお尋ねしてご意見をいただきたいと思いますと思っています。まず寝屋川市全体の教育を見据えて、望ましい就学前の教育を推進するということですが、そのことは自分たちの行っている教育・保育としても認識しなければいけないということと同時に直接就学前教育・保育に携わる人たちだけではなく、就学前教育・保育以外の先生方、あるいは市民の方々にもどのような教育・保育を行っているのか分かっていたかないといけないと思います。どのようにしたら分かっていたか考えることで、改めて自分たちが行っている就学前教育・保育を理解することができると思いますので、どのような角度からでも結構ですので、自由に発言いただけましたらと思います。

(委員)

縦のつながりは分かりやすいのですが、横とか斜めのつながりをもっと掘り下げていくべきと感じました。各学校、ボランティア、NPO もそうですが、それぞれ素晴らしい活動をされているのですが、自分たちのエリアだけで動いているように思われます。一見、それぞれが関係ないように見える団体と接することでヒントになったり、活かされたりすることがあるのではないかと審議の中で感じま

した。私もそうですが、子どもも何か上手くいかなかったときは落ち込むのですが、褒められたら嬉しくなるし、自信を持てると思います。大人も褒められて嫌な気分になる人は少ないと思うのですが、幼児の時は大人から褒められることで気分がよくなり、成長にもプラスになると思います。また、小学生、中学生になると友達から認めてもらえることが、生きる力になるかと思います。そういう話を聞いてみたいと思います。

（委員長）

ありがとうございます。これは子どもに関わるというところでは皆様に共通しているのですが、違う立場の人と子どもの成長発達について共有する場があればいいということですね。

（委員）

委員長から、いろんな角度からとのことでしたので、少し教育とは離れた角度の方がいいかと思ひまして、そのような話しを何かできればと思います。教育を商品と同じにすると語弊がありますが、例えば良い商品だから全て売れる、あるいは売れる訳ではないというふうに考えますと、いかにそれをマーケティングと言いますか、相手に対して商品の可視化をし、その本質あるいは内容をご理解いただく活動をするのが非常に大切だと思います。寝屋川市が良い教育を実践できていたとしても、それが相手に伝わらなければ、それはコミュニケーションとは言わないと思います。その中で何をすればいいのかですが、まずは可視化するのはです。直接教育に関わっている方でないと当事者ではないので関心は低いと思います。そういった意味では、マスメディアのマスという意味合いでの直接関係のない方に対しても広域に広報するというようなことは大切かと思います。例えば会社でもマスメディアにこの社長はよく出てるなどと言って見られることもあります。また、情報を発信するところが散らばりすぎると何を言いたいのか分からなくなるので、発信する方が同じ方で、共通のアイデンティティ、会社で言う CI 的なロゴマークと一緒にですが、アイデンティティを持って、その方が統一的に教育について発信をされる。そうすればその方がアイコンになるのではないかと思います。その中でまずは直接関わりがなく興味のない関わりのない方に広まることにより、そこから話がまた広がっていき、色々なところで寝屋川市は良いとか、こんなことをやっているとかの話になると思います。発信側が散らばりすぎると統一性がなくなり伝わりにくいと思います。可視化することが大事なことはみんな分かっているのですが、どう可視化するかということを各論的に決めていかないと、良い教育を行っていても伝わらなければ埋もれてしまうのではないのかと思います。

（委員長）

ありがとうございます。教育に携わる現場の人を発信のターゲットとして考えるのではなく、内容はもちろんきちんとしなければいけないですが、あちらこちらで発信するのではなく、また、ターゲットとするのも興味関心を持っている人

というよりももっと広い一般市民に向けて、そして発信する人も一番のアイコンとなる方からということが、有効的ではないかということですね。

(委員)

マーケティングの専門家ではありませんが、CMでも今旬の芸能人をよく見かけますが、商品の内容を見てもらう前に商品に着目してもらうという発想が必要だと思います。いろいろなユーザーが広域にいらっしゃる中で芸能人がCMに出ている商品というところからそのまま広がっていくという発想になってくるかと思います。そうなった場合に芸能人がアイドル、学者の方と色々と散らばるよりは、企業のイメージとしてどういう所を売りにするのか、どういう方をターゲット層とするのかということを考えられた芸能人の起用というのはすごく大事だと思いますので、そういうところを展開していくと、発信者というのは寝屋川市で影響力を持っている方が発信されることで大きな影響があるのではないかと思います。

(委員長)

ありがとうございます。可視化というぼんやりとした抽象的な言葉を具体的に考えると、その発信者も影響力を持った方、ターゲットも最初は広い方がいいのではないかということですね。

(委員)

少し現場目線に戻しまして、現場からしますと幼稚園は保育内容をまず保護者に知らせる。次は地域の方、次に今ちょうど小学校の先生と引継ぎの時期なので、入学する全部の小学校の先生と引継ぎをするのですが、引継ぎをさせていただく先生と、担任される先生は違うことが多いので、小学校内でどういうふうに引継ぎが行われているか少し分かりにくいところがあります。寝屋川市では小学校の先生と幼稚園の先生が合同で行う研究部会というものがあるのですが、そこに来られる先生方と幼稚園の職員は、一緒に研修していくので理解しあえるのですが、そこに来られない小学校の先生は幼稚園との関わりが少ないので、小学校の先生がどこまで幼稚園の教育を知って下さっているのかと思うことがあります。

(委員長)

よく幼小の連携というと、就学前施設の先生と小学校低学年の先生が連携できても、その連携している内容が小学校中高学年の先生にまで伝わっていない場合や、伝える必要がないと考えられる場合もあるかと思いますが、低学年の先生があまり中高学年に異動しないということも聞くことが一般論としてあるのですが、寝屋川市ではどういう感じでしょうか。

(委員)

学校内のことで言いますと、小学校は6歳から12歳まで幅広い学年が対象ですので、確かに入口のところである低学年を担当する教員と就学前施設の先生とのつながりが一番強いと思いますが、低学年中高学年の中でも異動はございますので、固定化されているということではないと思います。学校の中でも引き継ぎの仕方や、家庭の状況、児童の状況については、学校全体で組織的に共有するこ

とはすごく進んでいると思います。情報の直接の窓口としては、担当が幼稚園等に行かれたり、もしくは幼稚園等から情報を受ける窓口というのは限られています。例えば2年くらい後に、幼稚園・保育所の時の様子はどうだったのだろうとその資料を確認することもございます。引き継ぎの時に情報をすべて集約しましても、すぐに必要となることはそこまで多くなく、実際に子ども達と目の前で出会うことが教育として重要だと思います。何か課題にぶつかったり、保護者との話をしていくのに、一からお話していただかなくても、事前に資料で引き継いでいることがあれば、それはすごく有意義なことだと思います。

（委員長）

今の話を聞いていますと、委員が心配されているようなことは、そこまで心配する必要はないということですね。

（委員）

学校内での組織的な情報共有は常々心がけていかないといけないことと思います。

（委員長）

ありがとうございます。今ご説明がありましたが、まず幼稚園の現場は保護者に中身を伝え、次に地域の方、その後に小学校の先生という順番で伝達しているのですね。

（委員）

順番というわけではないのですが、特に今の時期は小学校の先生との引継ぎを密に行っています。

（委員）

私立の場合は市立と少し異なっていて、市立であればその地域に根付いた地域からの子どもたちが集まってくるということだと思うのですが、私立で申し上げますと去年で23校、今年は19校の小学校に進学するのです。今は卒園式の時期ですので、年長の先生方は引継ぎの資料作りとか色々なことをしていますが、19校の小学校の先生が入れ替わりこられて引き継いでいくということはとても困難です。時間的な問題もありますし、引き継ぎは一言二言で終わるものではございませんし、1校で時間的に1時間2時間要します。進学園児がひとりの小学校もあれば一つの小学校で複数クラスに進学園児がいれば、複数人の先生が引き継ぎを行う必要があります。ですので、引継時には留意すべき内容を中心に行っています。

（委員）

保育所にもいろいろな家庭環境のお子さんがいらっしやいまして、引継の際は、子どもたちのためにも、小学校に進学後に必要だと思い留意事項を伝えています。引継ぎの部分で言うと、先ほど委員もお話されたように、小学校内でも引き継いでくださっているということです。私が5歳で担任した子どもの中学校時の先生と関わることもありまして、その時に気になっていた子どものことを挙げると、

その先生に理解いただけるのです。小さいころからの課題は中学校になっても続いていることが感じられましたし、その先生からもその頃の子どもの話を聞いていたら、色々な対応ができたと言われました。それと私たちも色々な子どもがいる中で一生懸命ここまでがんばってきましたという部分と、まだまだ継続中ですが、小学校でもよろしくお願いしますという部分と、色々な子どもが小学校に進学していくのですが、その子どもが小学生、中学校になって、どういう子どもに育っていくのかということを気にしています。私たちも保育所を異動する中で、あの子どもはどう育っているのか気にしています。先程のお話で見通しをどう持つかというところでは、保こ幼小中の関わりや情報交換とかを行うことがすごく大事になっていくのではないかと思います。見通しを持つ保育については、私たちもこういう子どもに育ってほしいという中での教育・保育の組み立てということは、すごく大事になっていくのではないかと委員の皆様の話を聞いて思いました。

もう一つ、どのように分かりやすく伝えるかというところでは、子育て支援センターで勤務したときに、子育てをしてる保護者が寝屋川市の子育ては他市に比べてすごく充実してるとか、他市よりも進んでるとかそういうことをお聞きすることがありました。子育てが充実しているから寝屋川市に引っ越してきましたという保護者もいらっしゃるということは、他市にも発信できているということですが、保育所内のことで申し上げますと、保護者の中には保育所がどのような保育を行っているのか分かりにくいという方もいらっしゃいました。このようなギャップはなぜか感じていた時に、情報発信の仕方が私たちが考える方法では不十分なのではと感じました。情報発信は文書が中心ですが、今の保護者は文書よりも SNS といったメディアの方が良かったりします。市民の方に広く知っていただくあたりでは、子育て支援センターにいらした保護者に子育て支援センターをどのように知りましたかと尋ねたときに、祖母から聞きましたとか、近所の方から聞きましたと地域や保護者以外の家族からの発信源もあるということが分かりまして、広く伝えることもすごく大事だと感じています。また、もう一つは同じことを色々な人が伝える、色々なことを伝えるのではなく、同じ人が同じことを伝えるということも大事だと思います。

(委員長)

ありがとうございました。寝屋川市の就学前の教育・保育が充実しているということを、他市からこられた方が知っているというのは、どのような情報を見てそのように感じたのでしょうか。

(委員)

ホームページや、他の人からの口コミ等だと思います。リラットができた時には大々的な情報発信があったと思います。

(委員長)

市の広報がうまくいっているという一つの評価ですね。

(委員)

子育て支援についても大きく打ち出していると思います。

(委員長)

ありがとうございました。実際に子どもと関わる幼稚園・保育所・小学校とは異なる他の視点から見るとどう見えているのかと思っていましたので、お話しただきまして良かったです。保育所内では保護者がどのような保育をしているのか分かりにくいとの話もございました。寝屋川市の各教育・保育施設で実際どのような教育・保育をしているのか、何を目指しているのか、何を大切にしているのかとか、そういうことは保護者から見えていかがですか。

(委員)

わかりやすかったと思います。

(委員長)

なぜそう思いましたか。

(委員)

幼稚園入園時は登園することを嫌がっていた子どもが、卒園時には先生に会えなくなるのが寂しくなる。園での生活は楽しかったということも聞いていましたので。

(委員長)

ありがとうございました。つまり保護者の方は子どもが幸せだということで判断されるのですね。だから別にどのような教育・保育をしていただいているとか、そういうところまでは、あまり深くは考えていなかったということですね。今日も楽しかった、良かったと子どもが感じたら、預けて良かったということですね。委員はいかがですか。

(委員)

子どもからは楽しく通っていると聞いていますので。

(委員長)

それを視点としている方もいっぱいいらっしゃるということですね。

(委員)

私たち保護者は子どもの通っている幼稚園のことしか知ろうとしないかもしれません。私の子どもが通っていた幼稚園は、こまめに情報提供してくださる先生が多く、子どもの状況とか様子とか聞く機会が多かったです。広報とかそういったことはあまり意識していなかったです。

(委員長)

就学前教育・保育が小学校教育にどう繋がっていくのか、前回審議会時にすごく印象的だったのですが、そういうふうに繋がりについてよりも、その時の子どもの様子を保護者は見ていらっしゃるのですね。先程のお話の中で保育所でどのような保育を行っているのか分かりにくいとのことでしたが、どういう感じですか。

(委員)

保育所ではアンケートを年に1回取るのですが、そこでもっと遊具で遊ばせてほしい、伝承的な遊びをしてほしいというご意見もございます。保育所では日中は遊具で遊んでおり、あやとりやコマ回しといった伝承遊びも行っていますが、そのことが保護者に十分に伝わっていないところもあるのではないかと思います。保育所は特に担任の先生と保護者が関わる時間は十分ではないところもあり、クラスだより等に保育内容を記載いたしますが、保護者の皆様に十分には伝わりきっていないと思います。ではどのように伝えようかというところで、見やすいように写真にして壁新聞にするとか、工夫が必要だと感じています。だからクラスだよりを出したら十分に伝わるということではいけないと感じています。伝え方の工夫が必要ですし、クラスだよりで行事を記載しているが、それが分かりにくく参観日前に明日参観でしたかと聞かれることもありました。分かりやすく伝えるために、行事を大きく貼り出そうとか、お便りも行事の説明をたくさん記載すると、逆に分かりにくくなる等、アンケートにも分かりやすく書いてくださいという意見がありました。では短い文章でお便りを出そう、行事内容を大きな張り出しをしようとか工夫がいるとのことを保育所で話をしていました。

(委員長)

今課題にもなっているのですが、保育料等を支払って子どもを預けたら終わりという人が増えています。子どもは就学前教育・保育施設と家庭と一緒に育てることが本当は大切なので、就学前教育・保育施設で行っている教育・保育を家庭とどのように情報共有していけばいいかと言うのが現場の大きな課題になっています。

この審議会では、市の教育方針の中で就学前教育の縦のつながりとしての位置づけ、その根っこの部分を育てる就学前の教育・保育施設がどのようなことをしているかという発信の方法と中身についてご意見をいただいているのですが、行政も何か考えていることはありますか。

(事務局)

第1回目、第2回目の審議会の中で委員の皆様から市として具体的にどういうことを大切にしているのか、こういうビジョンを持って、子どもたちをこういう風なゴールを目指して育てたいというようなことにつきましては、寝屋川市教育大綱の中でお示しさせていただいています。本市においては「考える力」を確立するための一つの手法として、ディベート教育というものを進めていきたいということを書かしていただいているのですが、それを幅広い皆様に市がこういうことを大事にしているということを知っていただくことが必要なのではと感じています。現在までの審議会でのご意見等も踏まえまして、教育委員会、市長部局と連携・協力しながら、一目見て今、市がこういう子どもたちを育てるために、手法の一つとしてはディベートというものを大事にしながら就学前から中学校卒業までに通じるようなものを具体的にこういうことに取り組んでいますというよう

なものとして、何かお示しできるそういうものを検討できるような組織を立ち上げて、検討していくことが必要ではないかと事務局としては考えています。

（委員長）

それが少しでも可視化できましたら、審議会に提供いただけたらありがたいと思います。

縦の連携・つながりに集中して審議が広がっていきましたが、横の連携・つながりの方も、例えばそういう審議内容があればそれを副題にして、横の連携・つながりで共有できることがあるかもしれません。ここでいう横の連携・つながりというのは就学前の教育・保育施設のことですから、幼稚園・保育所園・認定こども園とそれぞれが役割的に重なる部分もございますし、それぞれが自負してここを大切にしたいと言うのもありますので、それをお互いに理解することは今後のために大切だと思われませんが何かご意見ありますでしょうか。

（委員）

私が今思うところですが、うちの園自体が市立保育所からの民営化なのですが、その時と今とでは感じることは少し違います。今のお話を含め包括的にお話させていただきますと、小学校の先生と幼稚園・保育所の先生は、教育の中では同じような共通認識の下で、接続というところでは、点だけではなく、もう少し広い面であったり、例えば、スタートカリキュラム、アプローチカリキュラムであったり、食い込んだ形で教育というのでも検討されています。認識についても少しずつ進んできたり、先生方同士の学び合いがあったりというようなことも全国的に進んでいると思います。しかし、これは教育関係者の中だけでのお話だと私は思っておりまして、保護者としては、保育所は預かってもらうところ、幼稚園は教育してくれるところと位置づけていると感じます。また、情報発信の仕方を誤ると、就学前教育は小学校教育の先取り教育であるというような捉え方を保護者がされると思います。そこが非常に困ることをございまして、例えば、今グローバルという名のもとの英語でございますが、少し前までは就学前に英語というと早期教育だという意見があったのですが、英語を学問として捉えるのかコミュニケーションの道具として捉えるのかというところです。うちの園では英語というものはコミュニケーション以前に子どもたちが例えばコスモポリタンという言葉もありますが、世界は一つでみんな一緒だよ、だからその一つとして色々な人がいて、目の青い人もいて、頭も金髪で自分とは肌の色が違う人もいる、色々な人がいるから世界なんだよというような捉え方なので言語はその後なのです。しかし、日本人は国際社会に行って発言もしない、インド人はいっぱい喋る、みたいなことが世の中でまかり通っているのです。では、日本人はなぜなのかというと、何か欧米に対する劣等感みたいなものがあるって、メイドインUSAであったり、何かそのようなことをいっているのです。それは教育が影響しているのか、状況が影響しているのか分らないのですが、何が上だ、何が下だというようなものの考え方が根強くあるのではないのでしょうか。だからこそ、幼稚園だ、保育所園だ、認

定こども園だということになるのではないのでしょうか。うちの園は保育園から認定こども園に変わりました。保護者からすると保育園から認定こども園に変わったことで教育をしてくれるということになりますが、園からすると今までも幼児教育を行っていたとなります。先生方同士では色々と情報共有できてきていると思うのですが、まだまだ教育・保育に携わる方以外の方には十分に周知できていないのではないかと思います。先程お話のございましたディベートでございますが、ディベートが急にできるようになるわけではないと思います。そのためには、子どもたちが自分の意見を言えるように、あるいは自分の意見を持てるようにしていかないとはいけません。自分はどう思うのかということをしないと、知識注入型でやっていけばいいというわけではないのです。だからコーチング的なお話というのも保育所園や幼稚園の段階でも必要になってくると思います。ですが前の段階で小学校はこういうことをしているから、就学前ではこういうことをしないといけないという逆算的な思考で言われると就学前教育というものは何か、小学校に進学するためのものかという感じになってしまうと思うのです。それについても可視化していかないと、教育・保育に携わる方以外の方々に、伝わらないのではないかと思います。就学前教育・保育がただ子どもを遊ばせているだけで先生は楽というように言われることもあります。砂場に座って子どものやり取りを見ることで、この子どもはこんなことができるようになってきた、成長してきている様子を見守っていることが、座っているだけで楽というように言われることもあるのですが、子ども同士の自主的な遊びに対し何か教えた方がいいのですかというように思うところもございます。こういったことから就学前教育について、小学校教育との連続性も踏まえて可視化していかないとはいけないなと思います。

（委員長）

法律が変わり、幼小中高の順番で書かれるようになってからどうしても就学前が小学校の前段階という風に捉えられることがございます。それが教育・保育に携わる方以外の方々は元々そう思っていたから余計強調されたということがありますが、実は幼児教育は独特の方法と独特の時期であるから、小学校教育に繋がってはいるのですが、小学校教育の下請け・先取りをしているわけではないのです。そのことは連続性を伝えるときに絶対に忘れてはいけないことだと思います。それと横のつながりのことですが、先程委員から保育園から認定こども園になったとのお話がございましたが、認定こども園と幼稚園と保育所園の横のつながりということで何かご意見がございしますか。

（委員）

このあたりの話は審議の核にもなってくると思うのですが、私としては幼児教育という部分で一緒だという思いは持っているのですが、保育所園は厚生労働省の管轄、幼稚園は文部科学省の管轄、認定こども園は内閣府の管轄であったり、所管の違いというか散らばりすぎていると思います。寝屋川市は行政として、こ

のようなことをどのように捉えて、どのように教育をまとめられるのかと思います。就学前教育・保育の現場では、保育所保育指針であったり、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領については若干違いはございますが、ほとんど整合性が取られているということは現場の先生方は十分認識されていると思いますが、利用者側が保育所園、幼稚園、認定こども園を線引きをしてるのではないかと思います。

（委員長）

ありがとうございました。実は、この審議会の名称は「寝屋川市立幼稚園・保育所の在り方に関する審議会」なのです。就学前の施設の在り方というのもざっくりした言い方ですが、もちろん私立の施設というのはそれぞれ独自性がありますので、それを一番に出していると思うのですが、では寝屋川市の教育において縦のつながり横のつながりの中で、就学前の教育・保育施設がどうあるべきかと考えたときに、市の就学前教育・保育をけん引していくようなそういう施設であり、他を引っ張っていくような役割もあると思います。そこで、今まで教育・保育の中味、ソフト面の話をしてきましたが、施設の在り方といったハード面の話もしなければいけないのではないかと思います。第1回目の審議会で、市立幼稚園の定員、在園児数を伺いましたが、現在の状況はどのような状況になっているかということを委員の皆様で共有して、その在り方というものも考えなければいけないと思います。委員の皆様も関心があるかと思いますので、事務局から情報提供をいただきたいと思います。

（事務局）

現在市立幼稚園は4園ございまして、現時点の令和3年4月の入園予定状況でございますが、4歳児の予定者数としまして、北幼稚園が25名、中央幼稚園が3名、南幼稚園が1名、啓明幼稚園が11名の計40名の4歳児が入園予定ということになっております。

（委員長）

私はこの数字を聞いてとてもびっくりしていますが、皆様も同じだと思います。入園希望者が少ないということが、すなわち教育内容が悪いということでは絶対にはないと思います。全体的な傾向として立地的な条件等も影響しているとは思いますが、先生方が一生懸命されていることへの直接的な評価ではないと思います。今後このことをマイナスに捉えるのではなく、この現状も踏まえて寝屋川市の市立の就学前の教育・保育施設がどうあるべきかということを委員の皆様と一緒に考えてみたいと思っています。冒頭部分の振り返りの時にも申しましたが、ある委員がそれぞれの教育・保育を壺に例えて、それぞれが一生懸命行っているが、そこで終わっており、内容は非常に良いが、お互いに共有できてない部分もあるというようなご意見を述べておられました。このようなご意見をステップにして、寝屋川市の教育を充実させるにはどうしたらいいかという議論に発展させていけたらと思っています。委員は寝屋川市のことをよくご存じでいつもの確に総括して

くださいますので、今までの議論をお聞きになっていかがでしょうか。もう一度、委員の皆様で共有し、考えたいと思いますのでまとめをお願いいたします。

（委員）

審議会が一番中核的な部分になると思いますので、少し発言は難しいのですが、自分の専門分野から考えて発言するのが良いと思いますので、直接的な答えになるか分かりませんが、私が考えていることをお話したいと思います。

今、他市や文部科学省の委員もしているのですが、その中で小学校中学校の連携・接続についての委員とか、問題提起とかに関わってきました。その時に上手くいく場合と上手くいかない場合の大きなポイントが2つあると思います。接続するときに大事なものは小学校から中学校まで、今回で言えば幼稚園・保育所園・認定こども園から小学校までになりますが、接続部分の教員同士の人間関係があげられると思います。幼稚園・保育所園等の先生と小学校、小学校の先生と中学校の先生の人間関係が上手くいって、情報交換をしっかりとできているかということです。先程委員もおっしゃっていたように、本当に学校内で引き継いだことを情報共有できているのかとか、疑心暗鬼になります。それが上手いことできていたら先程委員もおっしゃっていたように、すごく上手いこと情報交流ができていると、疑心暗鬼もなくなります。このことは縦の接続に非常に重要なところですよ。もう一つの重要なところですが、例えば寝屋川市だと1つの中学校区に2つの小学校があります。その2つの小学校同士で交流ができているのかがものすごく重要なのです。そこで同じような教育をすること、教育はそれぞれ違うと思うのですが、大事にするところはございます。就学前教育で大事にするところというのも根幹では変わらないと思います。それともう一つ、出口の教育もありますので、この辺をきちんとしようとの共通の認識があれば上手いこといきます。お話を色々お聞きしていると、皆さんがそれぞれ頑張っていらっしゃることもよく分かったし、保護者の方とか地域の方も満足しておられるということが理解できました。先程の事務局の報告で私の出身幼稚園の4歳児の予定者数を聞いて非常にショックを受けました。私は毎日砂場で遊ぶのが好きでしたし、先生も大好きでした。良いとか悪いとかではなく、社会状況であるとか、保護者の就労状況等も変化してきたというのを私たちはこれらも含めて寝屋川の未来のために考えていかないといけないと思います。だからそういう意味で言うと、幼稚園、保育所園、認定こども園のあるべき方向性というのは、横のつながりをしっかり持ってどういう方向に向かって行かないといけないということを、今まさに考えていかないといけないと思います。それに今委員のおっしゃったように、こういう時期だからこそ、こういう社会状況だからこそ、どちらの方向に向かって行かないといけないというのを考える時期に来ているのではないかと考えています。私自身これが解決法であるとは、なかなか言えないのですが、今横同士で繋がってどういう方針、どういう方向に行けばいいのか、例えば委員が保育園から認定こども園に変わったことで保護者の意識がすごく変わったこととかもヒントになるか

もしれません。だからそのあたりを考えていくのが、これから重要なことになると思います。結論というのは、私にはよく分かりませんが、まずそのためには今日のようなこういう議論をもっとオープンにし、小学校と保育所園・幼稚園・認定こども園の先生方ともっとつながりを深くしていくのが一つ。それとハード面もございます。社会情勢が変化していっている中で、ハード面でどのように対応していくというのがこれからの大きな課題だということぐらいまでは分かってきましたけれども、ではこうしようとはなかなか言えない。今はこのような感じのことしか言えません。

（委員長）

ありがとうございました。委員が先程総括としてまとめてくださったので、皆様が一生涯懸命議論してきたことがこういうことに繋がっているということが上手く理解できたと思います。ショックな数もございましたし、もちろんそれを意識しなければいけませんけれども、そこに注目するというよりも、今までの議論の延長上で就学前の寝屋川市の就学前教育・保育施設の在り方ということをご一緒に引き続き考えていきたいと思っています。

（委員）

先程の数字は、本当にショックな数なのですが、北幼稚園は25人の4歳児の入園予定者がいらっしゃいますので、集団教育は成り立つかと思いますが、残りの3園に関しては、幼稚園での集団教育というものをどのように捉えていくのかということが、園長会でもいつも議題に上がっています。南幼稚園に関しましては、来年4歳児は1人ということで、年長児が数人いますけど園の中で子どもたちをどういう風にしていってあげたらいいのかということ、南幼稚園だけではなく市立幼稚園4園で考えていくことが必要と言っているところです。市立幼稚園同士の交流もコロナ禍ということもありなかなか難しい状況です。また、園同士に一定の距離があるので、簡単に歩いてはいけない状況です。南幼稚園と啓明幼稚園では遠足を一緒に行くといった交流はずっと取り組んでいます。このようになるべく多くの園同士で交流していきたいと思っています。今年も交流事業の企画は行っていましたが、コロナ禍でそれができなかったというのがあります。園でも子どもたちに対しての活動の仕方とか指導の仕方が、25人に対する教育と1人2人に対する教育は活動内容が異なってきます。このような状況では異動になったときの職員の戸惑いもあるので、そういう意味でも4園の交流を通して先生も育てていく取り組みを今年行ったのですが、大阪府が緊急事態措置区域に指定される前に一度交流ができただけで後はできなかったのですが、教員の育成という側面の取り組みも考えないといけないと思っているところです。

（委員長）

ありがとうございました。幼児教育・保育の一つの課題といいいますか、家庭でも保護者が働いていたらそれはできにくいかもしれませんが、1対1の関わりというのは家庭でもできます。子ども同士の育ちあいというのがあるからこそ、幼

稚園・保育所園・認定こども園の意味あるわけです。個の育ちももちろん大切なのですが、その個と集団の両方のバランスを見ながら就学前施設では子どもと関わっているわけで、そういうことができにくい状況であれば、どれだけ苦労があるかということは想像できることです。だから集団保育の限界が見える状況で、実際には来春からどうすればよいのかというその苦労が思われます。市立幼稚園の先生方は、ある一定の人数の子どもに対する教育について学んではいても、現在のような状況での教育については当然学んではおられないと思います。先生方は集団の中で一人一人の子どもの育ちを見ながら集団そのものの育ちをも見るという教育を受けていると思います。今すぐここでこうしたらいいということは見つかりませんが、委員が先程おっしゃってくださったように、ハード面でもどうしていったらいいかということも考えなければいけないと思いますし、市としても課題を感じていらっしゃると思います。なかなか正解を導き出すのは困難ではございますが、委員の皆様とご一緒に考えていきたいと思います。

今日はショックな数字を示されたこともございましたが、しょんぼりはしないでください。次を見ることに意味があるのです。何か出口がきっとあるに違いなし、悪いことの結果としてあったわけではないです。私自身はそう思っています。それでは本日予定された案件は「その他」だけでございますが、皆様方から何かご意見がありますか。なければ事務局から連絡事項をお願いいたします。

（事務局）

事務局からの連絡事項でございます。次回の審議会は、4月中旬頃の開催を予定しております。委員の皆様におかれましては、ご多忙とは存じますが日程調整をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。以上でございます。

（委員長）

ありがとうございました。本日の会議はこれで終了となります。2か月に1回ぐらいですが、審議会で本当に教育・保育のことを一生懸命考える皆様方とご一緒に議論できてうれしく思います。大変な課題をかかえておりますけれども、4月にまたお目にかかれたらと思います。本当に今日は長時間ご協力いただきましてありがとうございました。

（閉会）